

「コミュニティ・スクール推進研修会」講演から

開催日 平成27年1月26日(月)

講師 文部科学省コミュニティ・スクール推進員 高木和久 先生

<研修会でお話されたことの一部です。>

☆ コミュニティ・スクールはあくまでも手段である。子どもを良くしていこうとする手段である。ボランティアを集めることが重要ではなく、組織やイベントを考える前に、今の社会で、子どもが育っていないことが現状としてあるので、「どんな子どもを育てるのか。」が重要である。

☆ ある地域で「この子どもは大人しく、勉強もするのでコミュニティ・スクールの必要性がない。」と言われる。今の子どもたちが、「大人に従順な子ども」、「大人に言われないと何もできない子ども」であるとする、そのことが課題である。

☆ あいさつ運動は何が目的なのか。あいさつをすることが目的なのか。それは違う。この運動から地域の人々の顔が見える状態、子どもと大人のコミュニケーションが確立されることが重要である。

☆ 大人だけで張り切っていて、子どもたちがどんな姿なのか、子どもの何を変えていくのが語られずに組織がつくられるところに空白の部分が出てくる。活性化の第一として大切な部分としてほしい。

☆ 子どもは活動からの参加で、すべて大人がセッティングしている。楽しいところだけ子どもにやらせている。子どもに「どうだった。」と聞くと、「楽しかった。」と答える。良いところだけさせて子どもを喜ばすことが、本当に子どもを喜ばせているのかということを学校運営協議会で議論すること。子どもが自分たちから企画して、自分たちで行動し、失敗も含めて褒めてもらい、失敗が評価される。この時の失敗は次の経験になる。今まで痛い目にあったことは次の経験に生きる。

☆ 校長は地域をつなぐ戦略づくりの営業マンと考える。地域へ出かけて、地域の人と話をする。他の素晴らしい人を紹介してもらえるなど、次々と地域の素晴らしい方と出会う。誰かがそういう役割をしなければならない。